

## 身近で喜ばれる被災者支援の一場面

国土交通委員会 専門員

ひらはら としあき  
櫛原 利明

その時、平成23年3月11日午後2時46分、会議中に突然起こった大きな揺れは、自身いまだかつて経験したことのない激しいもので、一瞬、「首都直下か」とも思ったが、テレビでは東北地方太平洋沖での大地震の発生を報じており、やがて、大津波の襲来を知った。

首都圏でも発災当夜は鉄道等が止まり、多くの「帰宅難民」が生じた。車道は車で大渋滞し、歩道も徒歩帰宅の人たちでラッシュ並みの混雑ぶりだ。都心からも、県境を越えて長時間歩いて帰った人もかなりいたというが、途中のコンビニはどこも飲食物料を買い求める人たちの長蛇の列で、しかも主立った食料品の棚は空っぽの有様。

そのような中で、千葉方面へ向かう京葉道路沿いの両国で、大相撲の陸奥（みちのく）部屋がちゃんこ鍋の炊き出しを行って帰宅者たちにふるまい、好評だったという。混乱の最中に短時間で、機転の利いた行動であった。しかし、本来は、一部屋ではなく相撲協会が、帰宅困難者のために国技館を一時避難所として開放すべきだったと思う。先の協会改革へ向けての外部有識者による「ガバナンス整備委員会」答申でも、公益法人としての協会の在り方が問題とされたが、従来ともすると「相撲部屋の集合体」としての側面が強く、協会としての迅速・的確な意思決定が弱いと言われてきた。今回、もし発災当夜に機動的に国技館を開放していたら大いに評価されたであろうにと、ちょっと残念な気がする。

その後も、横綱白鵬を始めとする各力士や各部屋は、自主的に被災地に支援物資を送ったり、募金活動を行ったりして、積極的に支援活動に取り組んでいた。被災地出身の力士が所属している相撲部屋も多く、「何とか力になりたい」と、居ても立ってもいられない気持ちだったのだろう。一方、相撲協会は、3月17日に日赤を通じて5,000万円を寄附することを決定し、また、4月6日、同15日に都内の避難所に横綱、大関等の上位力士を派遣して、炊き出しを行うとともに避難者と交流し、大変感謝されたようだ。

さらに、協会として正規に被災地へ赴くことが望まれていたものの、5月の「技量審査場所」があった（「八百長」問題を受け、通常の本場所とは違って入場無料であったが、筆者は、むしろ低額の有料にした上で収益を被災地へ寄附した方が良かったと思っている。）ことなどから遅れていたが、今回（6月4～8日）岩手・宮城・福島の数箇所で行われた「東日本大震災巡回慰問」が挙行された。被災者の方々は、おいしいちゃんこに舌鼓を打ち、人気力士とじかに触れ合うなどし、何よりの励みになったと、大喜びだったようだ。

このような支援活動は、「気は優しくて力持ち」という本来の「お相撲さん」のイメージにもぴったりだ。新公益法人化を目指す相撲協会としても、絶好の社会貢献であり、大相撲の信頼回復にも寄与するところ大なるものがあると思われる。今回の単発ではなく、今後とも継続的に、積極的に取り組んでいってもらいたいと思う。